

緑の光が命の道を浮かび上がらせた。黒潮町佐賀で津波避難の夜間誘導実験が行われ、日中の光をため込む蓄光材が試された。

バッテリーも、メンテナンスも不要。10年以上の屋外耐久性を持ち、日没後も12時間以上、光を放つ。東京



の民間会社が開発し、既に空港な

どで実用実績があるという。

町は実験に当たって周辺の街路灯を消し、蓄光材の開発会社なども延長約50メートルにわたって高さ約2メートルの暗幕を張り、漁港の光を遮蔽。本格的な暗闇を演出した。

ただ、当日の気象条件は決し

て良くなかった。昼間は曇天、夕方には雨も降り始めた。十分な光を蓄えられたのか心配したが、本番では手すりや階段の位置がくつきり。「こりゃあ、え

い」。住民が高台を目指すのに十分な目印になった。

「どんな条件でも一定の明るさをキープできる」。開発会社の社長も胸を張った。

蓄光材

町が現在、避難路の照明として採用している照明はソーラー式。蓄電池の交換が必要で、揺れなどで不具合が生じる恐れもある。

塩害にも強い蓄光材。コスト的にも導入しやすくなれば、沿岸市町村に広がる可能性は大だ。「夢の光」で終わらせたくない。(幡多・新田祐也)